

ということは、子どもの成長に大きな糧となることを、あの日改めて学んだようだ。

真夏日の中での除草も戦闘の連続だった。「雑草」と「いも」の区別がつかず、いちいち聞きくる子。間違えて蔓を抜いてしまう子などもあった。いもの育ちを良くするための蔓返しで栽培の作業が終了した。

待ちに待った収穫の日、自分の顔ほどある大きなきつまいもを掘り、歓声をあげる低学年、そんなようすを横目に見ながら、いも蔓の後片付けをする高学年。どの子の目も輝いていた。

収穫祭の儀式も済み、何よりも待っていた試食会。落ち葉や枯れ木を集め、焼きいもづくり。煙で涙を流し、顔中すすぐらけにし、やつとできあがった焼きいもをほおばりながら、A男が、「この焼きいも原始の味がする」と言う。E子もつられて、「ぜいたくな心を持たない原始の味がする」という返す。すすぐら子もまげずに、「なまけ心を持たない原始の味がする」といふれる。E子もつられて、「ぜいたくな心を持たない原始の味がする」と言う。Cの顔には、畑作りの苦労などを忘れていた。

分かっていてもできない現代の子の、この貴重な体験は大きな宝となつたことだろう。

(いわき市立綾小学校教諭)

この子らの心に ふれたい



橋本百合子

い本当に美しい目をしていた。何かを乗り越えてきた強さのせいだろうか。

その目は、私のすさんだ心をいましめると十分であった。そして、同時にその目は私に、この子らの心にふれた。障害児教育にたずさわりたいといい、障害児教育にたずさわりたいといい願いをうえつけてくれたのである。

あれから五年——。幸運にも私には

特殊学級という場が与えられ、五人の子どもたちとめぐり会うこともできた。

学校訪問があつた日、指導主事の先生に、「おじちゃん大好き」と言って

だきついていったK男。私も何度だきつかれただろう。彼は、人を疑う

ということを知らないのだろうか。

母親が病気で入院してしまつた日、

「先生、どうしよう」と言つて、私の

腕の中でワンワン泣いていたT子。悲

しい絵本を読んであげるたびに涙を流し、私がかぜをひいたと聞いて涙を

流れす。彼女の心の中は、いつも涙であふれてしまうのだろうか。

業間体育が終わると、いつでも周りに一、二年生がまとわりついてくる体重八十六キログラムのH男。「デブだなあ」「小錦みたい」……何と言われだつたのである。私は、このとき初めて、病気とたたかひながら勉強をして、病室の前には、小さく『須賀川養護学校医大分室』と書かれてあつた。そこは、病室ではなく、れつきとした教室だつたのである。

私は、このとき初めて、病室に通つてくる子どもたちとは、

いつも元氣いっぱいだった。少なくとも私はそう見えた。病氣であることの苦しみや悲しみなど全く感じさせな

とう』は、どんな意味をもつのだろ

うか。

母は死に、父は遠くで働いているため、伯父伯母に育てられているS子。

歌うことが大好きで、よく口ずさんでいる。てんかんという病気とたたかいながら、彼女の明るさは、いつたいど

こからくるのだろうか。

障害をもつてている子どもたちには、

その代償として、障害を乗り越えてい

くだけの力がそなわっているよう思

う。その力は、私にとって、とても魅

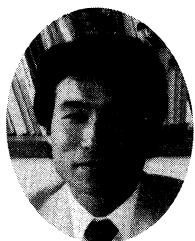
力的である。だからいつも思うのだろ

う、『この子らの心にふれたい』と。

(須賀川市立小塩江小学校教諭)

練習中止

高橋誠



「練習させてください」

「私たち、今度からは、きちんとや

りますから、どうかお願ひします」